

恩師の愛

河野泰彦

渡辺先生には、大学時代、歴史の講義、とくに卒業論文のご指導を請けた。三年の初め、研究室で宇佐八幡宮領の話が出、それがきっかけになって、「宇佐神領荘園の成立過程」を主題とすることになり、研究の方法、すすめかたについて教わったが、なによりもありがたかったのは、「宇佐大鏡」を書写されたノートを貸していただいたことである。完成することができたのは、先生のおかげである(また『大分県地方史』創刊号に掲載してくださった)。

昭和二七年の頃であったか(大学三年)、大分県史料編纂のため宇佐神宮庁で古文書の収集が行われた時、雑用をさせていた。先生方は、断簡になっている文書を解説し、繋いでいく作業をされたが、先生の解説の確かさと速さに驚きと偉大さを感じた。

先生が、学生に歴史研究について強調されたことは、地方史研究の推進と、歴史の実証的研究であった。前者については、郷土自慢的な郷土史でなく、中央と地方との関係を政治・経済・社会的視点から相互に解明することが重要であること、後者については、戦後の歴史は、唯物史観や考古学による研究によって、著しい発展を遂げたが、歴史研究の本流は、史料にもとづく科学的研究であるということであった。このお考えが、大分県地方史研究会の発足によって実践されたと考える。

卒業後は、教育現場で学校教育に携わり、先生から授かった歴史研究から遠ざかり、ご期待に添えなかつたことを大変申し訳なく思っている。

昨年秋、お伺いし、研究についてご示唆を受けたが、今年の年賀状にどうなったかと書かれ、心配してくださっている恩師の愛にありがたさをしみじみ感じた矢先に、訃報を聞き驚きと悲しみに呆然となった。

先生の学問に対する情熱と研究に対する厳しさは、生涯忘れることはできません。
先生のご冥福を衷心よりお祈り致します。

(元県立高校長)